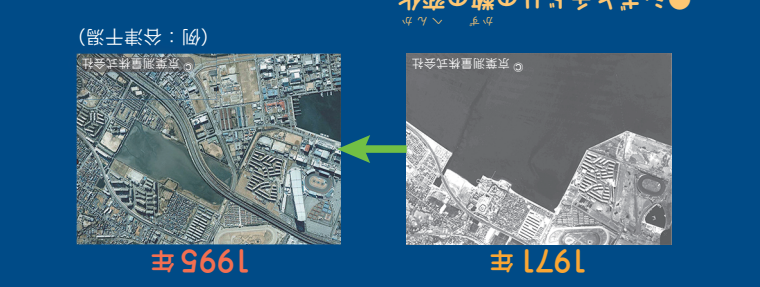


●シギとチドリの数の変化
日本の40年間(1975~2016年)のシギとチドリの数を調べたデータをみると、干潟や湿地の面積が減ったことで、鳥たちの数も減っていることがわかります。



●干潟の歴史
高度経済成長期の開発計画のため、1980年代までに全国の約4割の干潟が埋め立てられました。

日本の干潟やシギ・チドリは減っているの？

他の国に行けば安全なの？

日本だけでなく、重要な中継地点である黄海(中国大陸と朝鮮半島の間の海)でも、開発はどんどん進んでいます。国境を越えて渡りをするシギやチドリの仲間にとって、中国や韓国など他のアジア地域でも危険は迫っています。



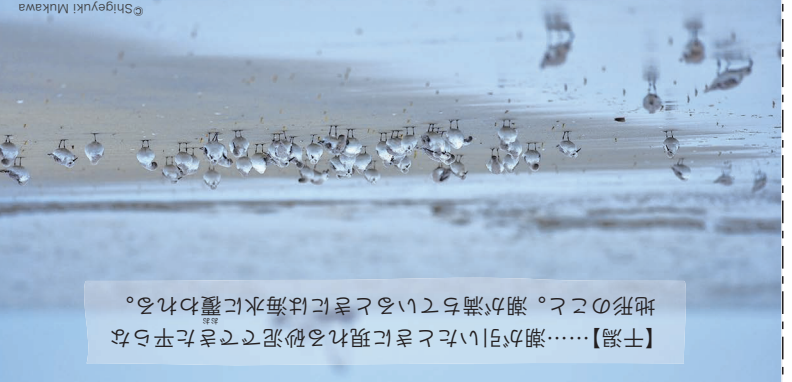
彼らを守るために中国では、今、鳥の種類や個体数を調べるモニタリング調査や、衛星追跡調査をしています。また、食べ物となる貝類の養殖を始めています。



昔、日本の干潟には、たくさんのシギやチドリがやってきました。また子供から大人まで多くの人が干潟で過ごしていました。今はシギやチドリも減り、人間も減ってなくなってきました。一度失った自然は、人間の手では回復させることができません。

漁師の方さん
漁協職員の時津さん

http://www.yokohama.com/watch?v=7ZSVH1H1MGEA



干潟ってどんなところ？

干潟を少しでも取り戻すために



ひとつの干潟・施設だけでは、渡り鳥を守れません。習志野市谷津干潟自然観察センターが拠点となって、以下の取組みを通して様々な人々と連携し、東京湾全体で力を合わせて渡り鳥を守ろうとしています。

- 自然再生 環境省: アオサ回収・ゴミ清掃活動
- 自然の賢い利用 地域住民: アオサを使った花壇づくり (市民の参加による干潟の生物調査)
- 教育と普及啓発 習志野市 谷津干潟観察センター: ホンビノス貝から賢い利用を考えるイベント、レンジャーによるガイド、ホンビノス貝を味わうイベント

シギ・チドリの旅

みなさんは、シギやチドリが遠い外国から長い旅の途中で日本に来ているのを知っていますか？
彼らは、冬はオーストラリアなどの南の国へ、夏は子育てするためロシアなどの北の国へ旅をします。その途中、羽を休め、エネルギーを補給するための中継地として、日本など東アジアの国々の干潟・湿地にやってきます。

シギ・チドリと渡り鳥の長い旅

みなさんも身の周りの干潟に、ちょこちょこ走り回るシギやチドリの仲間たちを探しにいってみよう！

この折りはアジア湿地シンポジウム2017のサイドイベントにおける発表をもとにバードライフ・インターナショナル東京とラムサールネットワーク日本が、習志野市谷津干潟自然観察センターの協力を得て作成しました。また、「公益信託 大成建設自然・歴史環境基金」の助成を受けて作成しました。
デザイン・イラスト / いきものパレット

Ramsar Network Japan BirdLife International

シギの仲間

大きさ : 15~40cm
目 : 大きい
食べ物 : 干潟や湿地を走り、表面にのびるコカイヤカニ、昆虫の幼虫をとる。

チドリ

大きさ : 15~65cm
目 : 短い、曲がっている
食べ物 : 干潟や湿地を走り、表面にのびるコカイヤカニをとる。

・海辺、川岸、水田や干潟などの湿地で生活する。
・チドリ目のシギ科とチドリ科(その他のいくつかの科を含む)

シギ・チドリってどんな鳥？

干潟と渡り鳥の今と昔